

保母教育へのアドラー心理学の適用

柴山 謙 二*

On the Application of "Adlerian Psychology" (Individual Psychology) to Education for Nursery School Teachers

Kenji SHIBAYAMA

(Received October 1, 1992)

はじめに

我が国には、欧米から数多くのカウンセリングや心理療法が導入され、発展されている。それらは、健康を損ねた人たちの病的な側面を改善しようとする「病理モデル」のものと、状態の如何を問わず健康な側面を支え拡大しようとする「成長モデル」のものに大別されよう。さらには、年齢を問わず、健康な人たちの様々な能力（潜在可能性）を高めようとする「開発モデル」が提唱されている。筆者には、数は少ないながらも、病理モデルから成長モデルさらには開発モデルを志向する研究者や臨床家が増加しているように、見受けられる。以上は心理臨床の領域に関してである。

一方、教育の領域に目を向ければ、昨今の学校を巡る様々な心理的問題に対して、文部省の「学校不適応対策調査研究協力者会議」（1992年）は「不登校はどの子にも起こり得る」との見解を示し、「児童生徒の居場所づくりを目指す」方策を提言したように、今やこのような提言が出るまで、事態は深刻化しているのである。

教育現場の状況は、児童や生徒あるいは保護者にカウンセリングや心理療法を実施している筆者には、目を覆うばかりのストレスフルな状況だと写る。実際、厚生省「児童・思春期精神障害研究班」（1992年）は村田を中心として、子どもの抑うつ状態を質問紙で調査したところ、治療が必要なかなりの抑うつ状態に陥っている者の疫学的推定値は5.9%を示し、「子どもたちが感じている不安や恐怖はただごとではない。子どものうつ状態の予防治療に取り組むべきである」と提言しているのである。しかし、従来

から学校教育においてカウンセリングの重要性が認識されており、各地で教師や養護教諭を対象とした学校カウンセリングの研修会が開催され、種々導入が図られているが、その定着は甚だ心もとない状況にあると言えよう。

このような状況を鑑みて、開発モデルのカウンセリングの方法を積極的に学校に適用としている研究者や臨床家がいる。しかも、単に個人カウンセリングだけではなく、グループ・カウンセリングさらには授業や学級経営にも取り組んでいるもの、来談者中心療法（島瀬1981）、人間性心理学（伊東1982）、合流教育（河津1988）、折衷派（国分1981）がある¹⁾。そのいずれもが理論と技術の学習を当然求めているが、最も重要視しているのは他ならぬ「子どもに対する教師自身の人間関係の取り方」である。そして、それらのほとんどが、グループ体験学習によって、教師の人間性を開発し教育しようとしているのである。

カウンセリングによる教師教育については、野島（1989）はわが国のグループ体験学習によるものを概観し、「教師自身が、知的・概念的レベルの認知学習と感情レベルの体験学習の両者を統合できる学習を経験していなければ、そのようなこと（全人的教育）をやらせようとしても無理なことである。……特に（知育偏重の）わが国の教師教育にとってグループ体験学習は重要でかつ必要なものであると言えよう²⁾」と指摘した。

現在筆者はシカゴ学派を中心とした現代アドラー心理学（野田1989, 1991。以下アドラー心理学と称する）に心理臨床のアイデンティティを持っている。それは、「現代アドラー心理学が人間性を善なるものと見なし、人間は集団に所属し、交流し、価値を認められ、個性を発揮し、成長したいとの欲求を持つ、

* 養護教育科

自己選択・自己決断・自己責任をなす実存的存在である」との理論に筆者が共感するからであり、そして、「個人のみならず集団にとって、有益な理論と方法を持っており、しかも学校教育においても有効だ」と判断するからでもある。野田（1989）は学校教育に生かすアドラー心理学の方略を具体的に著し、教育界にインパクトを与えている。また、日本アドラー心理学会では「全国アドラー心理学教育実践連絡協議会」が組織され、各地の教師の教育実践が蒐集されている。さらには、数多くの問題行動が頻発し荒廃していた横須賀市立池上中学校では、アドラー心理学を導入して、「自己選択・自己責任による生徒指導を徹底し、学校をよみがえらせ」⁹⁾、文部省から生徒指導総合推進校に指定され、1991年秋には公開研究発表会が開催されるまでになった。学校長である磯野（1989）は「教師による生徒の見方が変わったことで教師自身の意識変革がおきた。……生徒指導は一人ひとりの生徒に関わり、その個性を大切にすることから始まる。どの生徒も多様なすばらしい可能性と能力を持つ、かけがえのない存在である。その能力と可能性をいかに伸ばしてやるかが我々教師の課題であろう」と記している。つまり、生徒に対する教師自身の意識変革が重要であると言うのである。

アドラー心理学は「共同体感覚」の開発を目標として、心理臨床、家庭教育、学校教育、組織運営に適用されている。そして、人間関係の取り方として、相互に尊敬し相互に信頼し合う協力的交遊関係（権威権力的なタテの関係に対して、「ヨコの関係」と呼ばれる）を取り結ぶ。野田（1990）は、「実生活においてアドラー心理学を実践して、それが生活法として定着した人」としてのカウンセラーや教師を養成している。つまり、ヨコの関係を実生活で達成することが、カウンセラーや教師の最優先の課題だと捉えているのである。筆者は彼のカウンセラー養成講座に参加したが、教師や保母も多数出席していた。つまり、その講座は教師教育の場となっていた。

さて、このようなアドラー心理学の理論と方法を学び深めるために、筆者は学習会を継続しているが、学習会を「共同体感覚を開発し、ヨコの関係を共に身に付けていくための研究と実験の場」と設定している。そして、学習会は構成的なグループ体験学習の形を取り、筆者がグループ・リーダーとなって、知的学習・体験学習・実践報告の3つを柱として、その学習を深めている。多くの熱心な教師や保母たちが参加して、学習会の感想を寄せてくれるが、内

容も運営の仕方もおおよそ好評である。柴山（1991）はその活動の一部を紹介したが、活動報告に掲載されている教師たちの感想を読むと、まさに学習会が教師教育の場となっていることが分かる。そして、会員は職場や家庭で地道に実践し、それぞれ相応の教育効果をあげている。また、学習会は通信を発行しているが、会員各自による実践報告を載せているので、それらが読者にとっての具体的な対応の参考例となり、相互学習・相互啓発のメディアとして機能している。

このような筆者の実践研究の過程で幾人かの保育園長と出会い、保母の教育を依頼され、以下に示す保母のための学習会が開かれるようになった。アドラー心理学の学習グループは全国にいくつかあるが、保母を対象にした教育の実践は寡聞にして知らない。そこで、本稿においては、筆者がリーダーとして推進している学習会の内容を報告し、アドラー心理学による保母教育のための、学習会の効果的な構成の仕方について考察したい。

学習会の内容

学習会の経過と構成

この学習会は1991年2月2日から始まり、2ヶ月に1回のペースで開かれている。1回は2～2.5時間

表1 学習会の内容

回数	内 容
第1回	アドラー心理学の概要；罰と賞の弊害、勇気づけ、火遊びをした子どもへの対応
第2回	ペア・リスニング；「アドラー心理学の印象」聴くことの大切さ
第3回	ディスカッションの仕方；「男と女はどちらが強い」給食時間内に食べてもらうには
第4回	ペア・リスニング；「興味や関心のあること」子どもの興味を把握しよう兄弟順位とライフスタイル
第5回	教育の目標；4つのS野田俊作講演テープ；暴力構造をなくすと？
第6回	ペア・リスニング；「今年の私の良い所、嬉しかったこと」 実践報告；「排泄の自立の勇気づけ」

である。表1に初回から第6回までの内容を示す。学習会は、筆者がリーダーとなって、①アドラー心理学の理論と方法（特に勇気づけ）を解説する、②グループ・ワークで参加者自身が各々の心を見つめ、掘り込み、理論と方法のエッセンスを感得する、③参加者が今話題にしたい問題や事例について討論し、筆者がコメントし、理解を深めることで構成されている。

この学習会では、「参加者同士が交流し、それぞれの個性を認め合い、勇気づけ合うこと」が筆者から求められている。すなわち、学習会を通じて、参加者の「共同体感覚の開発」が企図されているのである。なお、アドラー心理学の基礎知識については、「クラスはよみがえる」（野田・萩, 1989）「STEP子育て法」（柳平, 1989）が副読本として推薦され、各自がそれらを自学自習している。そして、表1に見られるように、発足後1年経過する内に、アドラー心理学を実践し報告するようになってきているのである。

本稿で報告するものは、1992年4月24日18:45~21:00に、熊本県天草郡大矢野町のみつる保育園で開催された第7回学習会についてである。今年度は「STEP子育て法」をテキストとして学習会の中で取り扱うこととした。参加者は、みつる保育園・あゆみ保育園・慈愛保育園の園長および保母や関係職員の14名であった。

学習会の内容

1) 第1部：勇気づけられた体験の共有

(1) 体験の回想

リーダーは参加者に次のように課題を説明する。「子どもの頃、親や教師やその他の人から、自分を認めてもらったり、分かってもらったり、支えてもらったりして、嬉しかった体験、元気や自信が出てきた体験を思い出してください。あらましをメモに5分間ぐらいで書いてください」。B6版白紙を配付する。5分後に時間が来たことを告げ、「今年度取り組んで行きたいテーマを考えてください。ずばり一言に決めて、メモの下に書いてください」と次の課題を言う。

(2) リスニングのやり方

簡単な椅子取りゲーム（各自が心の中で自分の座りたい椅子を決める。合図とともにその椅子に突進し、椅子を獲得する）を3回行う。皆賑やかに笑う。場の雰囲気のリラックスする。そして、ペアでリスニングをし易いように、椅子の輪を大きくする。隣同士でペアを作り、握手して、挨拶をする。話し手

と聞き手の役割を決める。ジャンケンをして5回して3回勝った人を話し手（Aさん）とし、片方を聞き手（Bさん）とする。

リスニングのポイントは次の3点とした。

- ①相手の話をよく聴く。自分勝手に解釈せずに、相手の言うことを十分に聴く。
- ②開かれた質問を意識して使う。「どんな思い出ですか?」「どんな気持ちだったのですか?」「どうなったんですか?」など。
- ③反映的応答を意識的に2、3回やる。「嬉しかったんですね」「ほっと安心したんですね」「元気が出てきたんですね」など。

(3) リスニング

Aさんが5分間自分の勇気づけられた体験を話す。Bさんがそれをじっくりと聴く。次に両者とも役割を交代し、5分間の対話をする。このリスニングは恒例になっているので、各自すぐに取り組む。すぐ互いが身体全体で反応する「良いコミュニケーション」の様相を示してくる。賑やかに対話が進む。

(4) シェアリング

一つの輪になって、勇気づけられた体験の紹介と対話の感想をシェアリングする。今回は代理報告（聞き手が話し手の話を紹介する。付け足すことがあれば、本人が語る形式）とした。皆とても熱心に聴いている。「うん、うん」「あー」「うーん」などと相槌が出てくる。皆身体全体が和らいで、頬が紅潮し、その人の嬉しさや喜びが伝わり、輪がほのぼのとした温かさや優しさに満ちてくる。特に、報告された人は一層嬉しく感じている様子である。

(5) まとめ

リーダーは「皆さん、とってもいい話ですね。聞いていて、心が温まる、そんな感じがします。さて、これらの話に共通するのはどんなこと何でしょうか?」と問いかけ、少しの間を置いて、「私が感じたのは、次のようなことです」と次の5点にまとめた。

- ①自分をとても大切にしてくれた。
- ②その時の自分の気持ちを分かってくれた。
- ③自分の良さや能力を認めてくれたり、見つけ出してくれた。
- ④怒ったり叱ったりせずに、どうしたらいいのかを教えてくれた。
- ⑤そんな関わりをしてもらおうと、嬉しかったり、安心したり、元気が出たり、やる気が出てきたりした。

参加者はまとめたことに一つ一つ納得していた。休憩を10分間取る。

2) 第2部：テキスト「STEP子育て法」の解説と輪読

(1)テキストP18の「あなたならどうしますか」という設問を読む。これは、〈毎朝一人では起きられない5歳児の朝の様子、それを心配している母親〉に対してどう考えるかの設問である。「子どもの行動にあれこれ手を貸し、口を出す」母親は、子どもの生活の選択と決断を奪って、やる気や責任感を失わせてしまうことが多いと説明する。

(2)リーダーによるカウンセリング事例(未発表)の解説：

以下の事例を話し、親の過干渉や過保護な養育態度が子どもの自主性を歪め、勇気を挫き、神経症状を生じさせるかを説明した。

テートと叫ぶチックの女子中学生(第1子)の母親はとても過保護で過干渉だった。子どもが中学3年生になっても布団を上げ下げし、机を片付け、5時という早すぎる門限を決めて守らないと叱りつけたり、友人関係が好ましくないと説教したり、カバンの中身を調べていた。来談した時は高校受験前だったので、本人の意思を無視して勉強を強く命令するほどでした。カウンセリングでは、本人と母親との人間関係が具体的に語られ、「母が良かれと思った行動の結果が大変まずいものとなっていて、子どもにプレッシャーを与えたり、反発心を強めたりしている。逆効果になっていること」を指摘し、「自立し仲間と交流したい」思春期の心理を説明した。母親も納得して娘への行動を改めるようになった。本人は入学試験に合格し、友人たちと春休みを楽しんでいた。3ヶ月ほどで症状もほぼ消失していた。しかし、友人宅に外泊したことを訝った母親は、本人の机やバッグを調べてディスコの入場券を見つけた。本人を問い詰め友人宅に電話したところ、5~6人ほどでディスコで遊んでいたことが判明した。母親は本人が不良になることを心配し、それを本人に言う「信用していない」と腹を立て、「ディスコに行くのが何が悪い。分からないように行ってやる」「何言っているの。未成年でしょ。ダメよ」と言い争いになり、症状が再発してきた。

そこで、カウンセラーは「ディスコに行ったのは、別かれる友人と一緒に居たい、楽しみたいからと思われる。母親が彼女の目的を理解できなかったから、いつまでもディスコに行くんだと反発しているようだ。ディスコに行って補導されると停学にもなることは知っている。本人は踊りたい、ジャズダンスをしたいと言っている。お母さんは抵抗感があるんで

しょうけど、実際はかなりハードで健康的だと思いますから、ぜひ一緒に〇〇町のスタジオを見学されたら、いかがでしょうか？」と勧めて、娘と出掛けて行った。母親はスタジオに通って良いと許可を出した。しかし、実際には本人は行かないと返事をした。その後、親子関係も良くなり、学校での適応も良く、症状は消失した。

事例の解説のまとめとして、「子どもの成長・発達に大切なことは、①子どもの自由意思と自主性を見守ること、②遊びの中で人間関係を育むこと、③それぞれの個性を認め、④その子の目的と関心をいつも理解することである」ことを力説した。

3) 第3部：〈いい親と責任感のある親〉の輪読

親の養育態度に関して、「アドラー心理学では、「生活時間を規則正しく守らせるために、子どもの行動に配慮し手助けをし、軌道からはずれると厳しく叱りつけ、子ども自身の選択と決断を奪って、やる気や責任感を失わせる親」を〈いい親〉と呼ぶ。一方、「何をするか、何がしたいか、その選択や決断は子ども自身にまかせ、本人が迷ったり、失敗したりする権利を認め、しかも、優しく毅然とした態度で子どもに自分の責任をとらせる親」を〈責任感ある親〉と呼ぶ」とリーダーは説明した。そして、〈いい親と責任感ある親の対比表〉(P42)を「親を保母と読み替えて理解しましょう」と呼びかけて、一人一段ずつ輪読した。

ある参加者は、輪読直後に、「手を出したり、声をかけ過ぎたりしています。本当にそう思います。親としてもですが、いい保母ではなく、責任感ある保母を取り組みたい」と発言した。

4) 第4部：実践報告

あゆみ保育園の小林保母による「知恵遅れと多動を呈する幼児(A男4歳)」についての1年間の実践報告があった。報告は以下の通りである。

4月に入園したA男は保育園内ではクラスに入らず園内を動き回り、ガス栓を開閉したり、職員室の中に入り、レコード・テープ・テレビ・パソコンなどをいじり壊し、大便・小便をあちこち自由にする。また、園からいきなり道路に出て走り回ったり、車に跳ねられそうになったり、車を止めたり、近所の家の水道を開いたり、ガス栓を開閉したりするような状態であった。職員はどうしたものかと話し合いを持ちつづけた結果、7月から全職員の協力の下に、小林保母がA男と弟(3歳)の二人を受持ち、「しっかりと二人に相手をして、一つ一つのことにじっく

りと対処していく」という方針を取るようになった。「この二人の子を心から尊敬し信頼することから始めよう。私の気持ちと考えをしっかりと伝え、どうしたらよいかを一緒に考えてやっていこう」と考えた。給食指導を例にとれば、次のような対応であった。A男は自分の好きな副食だけ食べて、保母と弟のものを欲しがり、保母が「ごはん食べよう」と言うと、大声を発して部屋を出る。保母は追いかけると、庭を走り回りやっとうちに戻ると、保母の副食を食べてしまうのであった。誰のものをどう食べたらよいかを説明して主食も取るよう促すと、指示を実行するのであった。指示どおり出来たと思っても、他の行動では指示は有効にはならなかった。しかし、1ヶ月後には、午睡の後片付けもするようになって、さらに1ヶ月後には、他の保母が休暇中に代わりにクラスを担当する時には、二人は一緒にクラスに入り困るようなこともせず、他児とも一緒に生活するようになった。保母がふたりだけを残すと、泣いて大変であった。9月の運動会では、同年齢の子ども達と笑い喜び活動するようになった。12月には少しずつ自分から遊戯室に近づくようになり、それまでは廊下だったのがクラスに入り活動に参加するようになった。そして、1月から3月は、保母のする手品や劇に大きく喜び拍手するほどになり、卒園式には静かに椅子に座って参加できた。

「だめなことはしっかりと伝え、どうしたら良いかを教え伝えていく。嬉しいと感じたときは、抱きしめて、一緒に喜びを共にする」との柴山のアドバイスを実行した。信頼することがどんなに大きな力になるか、二人の子どもが教えてくれた。全職員が温かく協力してくれた力が大きいと思う。これがアドラー心理学に出会えた私の大きな喜びである。

彼女の報告について、リーダーは次のようにコメントした。

「保母の熱意が功を奏した。汚れも乗り越えた身体全体での取り組みであったし、このような1対1での濃厚な関係が本児には必要であった。何をしたいのか、どうしたいのかを把握して、どうしたらいいのかを焦らず少しずつ身振り手振りで教えている。最初は腹立ちも苛立ちもあったようだが、それをコントロールして、子どもにどうしたらいいかを伝えている。行動療法的に賞罰で実施できるが、それをアドラーでやったことが意義がある。罰はない。賞はあっても、一緒に喜んでいる。それが子どもに伝わっている。」

「小林さんの取り組みも素晴らしいものだと思うが、園全体で「障害を持つ子どもを受け入れる」との決心が大きい。受入れ当初からとても困ることが多かったが、皆がなんとか対応しようとしていた。運動会にも参加できたし、卒園式にも「出席させよう」と園長が提案して皆で話し合っただけで決めた。粹な計らいだと思います。障害児であるので、特殊教育を受けた方がこの子のためである。福祉総合相談所で再度判定を受けた方が良い。就学相談が秋にあるので、園としても心がけていた方が良い。」

「アドラー心理学を園でも家庭でも実践して欲しい」と訴えて、学習会を終了した。

その後

1992年7月9日に次の学習会が開かれた。参加者は保育園関係者と小学校教師1名と中学校教師1名を含んだ計16名であった。内容は、①熊本県でのアドラー心理学の学習グループの紹介、②中学校教師の実践報告（生徒との良い人間関係の成立とクラスの雰囲気）、③リスニング（小さい頃のいたずらや失敗）とシェアリング、④保母の実践報告（幼児の部屋の水撒きの観察と目的の把握、「どうしたら良いのかな」との声かけ）、⑤STEP子育て法の輪読（子どもは好奇心いっぱい、失敗を許しましょう）、⑥著の忘れものへの対処/勉強の勧め方と課題の分離であった。⑥については、「子どものことで、このような場合、どう考えてどのように対処したらよいか」について、ミニ・オープン・カウンセリングとなった。この回は教師との交流が図られたのが、特色であった。

学習会の感想

筆者は学習会の翌日参加者宛に感想文（記名による記述式）を郵送し、即日回答を求めた。感想は、①勇気づけられた体験を互いに話し合い、報告を聴いて、感じたこと、思ったこと、②カウンセリング事例で感じたこと、思ったこと、③「いい親と責任ある親」を読んだ感想、④実践報告（保母の障害児への取り組み）についての感想、⑤その他（全体的な雰囲気や自分自身の気づき）の5点について記述してもらった。12名分の感想文を1週間以内に受け取った。以下に代表的な感想を記述した。

勇気づけられた体験の話し合い

以下の感想に見るように、勇気づけられて嬉しく感じ、自信や励ましや喜びを感じ、そして現在の自

分があることを実感した参加者が多かった。また、話し聴くことの楽しさや喜びを感じていて、今後の勇気づけを実践する動機づけともなっている。

「小さい頃に勇気づけられたことが現在の自分の中で大きなこととして残り、育ち、生きていく励みになったことの素晴らしさに感動を覚えました。」

「勇気づけてくれた人がとても素晴らしい人に来てくる。私に自信を持たせてくれたからだろう。」

「『自分を分かってくれる、大事にしてくれる』と感じた時、気持ちや行動がプラスの方向に進んでいくんだという事を感じた。」

「失敗を恐れず、努力して、挑戦する気持ちが大切なんだと感じました。」

「家族や学校などの集団の中で、存在がどんな形でも認められることは嬉しいものだ」「両親は陰ながら子どもの気持ちを分かってくれていて、それが子どもに伝わって勇気づけられているのだな一と思った。」

「メモしたり、話したり、聞いたりしていくうちに色々と思い出してきました。いつもは忘れていたのですが、いい体験をしているんだと分かってきました。とても気持ちよくなりました。」

「様々な話が聞けて嬉しく思います。話下手なのでドキマガしてしまうのですが、もっと色々な人と話せるようになりたいという気持ちが大きくなっています。」

「学習会で色々な人の体験談を聴いて、その時にまた勇気づけられた」

「皆親や先生たちから勇気づけをもらい、今は自ら勇気づけを与えていこうとしている姿がとても良かったです。」

「初めは思い出せなかった。意外と少ない。」

「私が思い出した体験は勇気づけというより評価で自信を持った体験だったのだと後で感じた。それは自分が『みかけ』を気にしているからだと感じた。」

カウンセリング事例について

以下のように、事例を通して、子どもを尊敬し信頼することの重要性をあらためて感じ、保育も生活も気をつけようと内省する参加者が多かった。

「母親が子どもに対する見方や考え方、接し方の誤りに気づき、子どもを信じることができるようになったことは、素晴らしいことだと思う。」

「チックは心が苦しかったのだろう。ジャズダンスに結局は通わなかったことは、その子の精神的な苦

しみは母親の気持ちひとつだった(違うものになる)と感じた。」「子どもが自分の存在を母親に認めさせようとしているのが分かった。子どもが自分の意志で行動していくことがいかに大切かを教えてもらった。」

「子どもの気持ちを素直に聞く、子どもの意志を尊重する事の大切さを感じました」「子どもに任せること、信じること、待つことの大切さをすごく考えさせられた。」「子どもがいい方向に向かったことを嬉しく感じました。カウンセリングも素晴らしいものだったが、母親の子どもを思う気持ちがあったのが良かったと思った。」

「カウンセラーの親に対する優しい接し方や話し方、その奥に隠してあるような厳しさが母親を変えることが出来たのだろう。」

「子どものためと思って善意の気持ちでやっていることが、やり方が間違っているために、逆に子どもを傷つけたり、負担を与えていることがある。.. 保母として母として思い当たることもあり、保育も育児についても反省することがあった。」

「いい親と責任ある親」について

以下のように、参加者のほとんどは「いい親」を「いい保母」に置き換え、仕事や生活の自分の姿を確実に照らし、子どもの課題に介入する危険性を認識し子どもの能力を信頼し、新たに取り組む意志を持ったようである。

「学習会や本を読んだ時は、『責任ある保母』をしっかり考えるのだが、いつの間にか『いい保母』へと流れていってしまうことを反省した。『親切すぎる』と創美で言われたが、それが『いい保母』だったと分かった。」

「『いい親』にならねばならないという思いが、子どもの課題にでしゃばらせるのだと思った。子どもが自分の課題を自分で解決できるよう援助することだと理解した」「自分自身を考えてみたら、『いい親』ばい事が多かった気がする。目が覚めたようだった。…先の先まで考える性格なので、気づかないうちにそうになっていた。」

「私はまだ随分子どもの課題に口出しをしている。」

「責任ある子どもたちを育てるには、子どもをほめることだけではいけない。子どもを信頼して、子どもに任せて、見守っていくことが大切だと思った。」

「私は母親からほとんど手をかけられず、口出しもありませんでした。寂しいと思ったこともありまし

たが、この本を読んだ時、私を信頼してくれていたのかと思いました。一人でも多くの人に読んでもらいたいです」。

「頭で理解できたつもりが実際の園や家庭での自分を振り返ってみると、まるっきり分かっていない人間のようなです。「いい親」に当てはまる部分を1つずつ『責任ある親(保母)』に移さなければいけません」。

「かなり難しいですが、感情的にならずに待つことを考えながら、責任ある親・保母に近づきたいです」。

「保育をしている自分を振り返ってみると、何てことをしているのだろうと思うことが多いのに、悲しくなってしまう。短気な自分を反省するばかりです」。

「小学校4年生の長男が朝グズグズして友だちを待たせませす。学習会の後、子どもと朝食の時間と家を出ていく時間を確認し合いました。間に合わなければ、朝食もとれず、一人で登校せねばならないことも伝えました。2～3日は朝食ぬきで登校したり、一人で登校したりして、本人にこたえたようでその後は早く起きて登校するようになりました」。

実践報告について

以下のように、参加者全部が保母の障害児への一生懸命な取り組みに感動を覚え、園全体の支えが大きなものであることを認識していた。

「保母と子どもの間に深い信頼関係があったのだろうと思った。子どもたちは幸せだったろうし、成長できたんだろう」。

「すばらしかった。保母が嬉しいと感じた時に嬉しいと言い、本気で保育に取り組まれたことがよかったのだろう。小林さんが輝いて見えた」。

「自分の感情を抑えなければいけないことも多かっただろう」。

「自分から積極的に取り組まれたことはすばらしい。より一層障害児に対する知識や技術を学ぶ必要性を感じた」。

「1年間、同じ園で見ている、二人はずいぶん成長した。小林さんのがんばりだし、園全体の二人に対しての言葉かけがとても良かったのではないかと思います」。

「小林さんが二人の生活場面で言葉、食事、排泄、何でも自分が最後まで行うように気をつけられ、一生懸命緊密に保育されてこられたように思います。園全体の保母同士の助け合いが保育にはとても大切

なように思います」。

「何事も焦らず待つことだと思いました」。

「報告のあった子どもとは異なるのですが、障害を持った子どもを受け持っていますので、とても興味深く聴きました。私はとまどうこともあるのですが、少しずつ成長しているのが救いです。彼を大切に、自分自身も成長したい」。

「園全体で話し合い考えられている事がすばらしい。障害児との生活は保母本人しか分からない努力が必要だと思いますが、その分感動も大きいものがある事が伝わってきました」。

「皆さんが一心に子どもたちのことを思っておられ、子どもたちの成長を心から喜ばれているのがよく伝わってきました」。

その他(全体的な雰囲気や自分自身の気づき)

以下のように、対話し交流を深める楽しさを感じつつ、グループ全体で発言するのに恥ずかしさや抵抗感を感じながらも自分を表現するようになり、少しずつ自己変革している。また、テーマを実践する決意も記している。

「『責任ある保母』を忘れないで実践して、子どもにとっていい出会いであるよう努力していきたい」。

「なかなか変わらないが、十分に気をつけて優しく冷静に言葉がかけられるようになりたいと思っている」。

「AさんBさんの対話で、相手の人が自分とおなじ気持ち(劣等感)を持ってたことが分かって、何か嬉しかったです」。

「会の中で自分のことを少しずつだけ、抵抗感なく話せるようになったことがとても嬉しいです」。

「勇気づけられた体験をすぐには思いだせなかった。でも、皆の心温まるお話が聞いて良かった」。

「話すことが苦手なので、体験の対話は苦手です。自分を変えていかなければならないのでしょうか…先生の話や皆さんの話をもっと聴けたらと思います」。

「言葉に出して自らを話すのは恥ずかしくて、雰囲気も苦手なのですが、回を重ねる毎に少しずつ少しずつ自分が変わっていているのが分かります。皆さんと先生に会えたことがとても嬉しく思います」。

「学習会の後は自己嫌悪に陥ります。自由保育もアドラー心理学も向いていないのではと考えてしまいます。2～3日すると『これからだ。頑張ろう』と自分を勇気づけています。自分が変われば相手も変

わると信じて」。

「皆の前で自分の思っていることを話すのが、苦手です。少しずつ変えていこうと参加しています。言おうとしている事の半分も言えず、悔しかったり、情けなかったり、でも刺激になります。やっぱり挑戦ですね」。

考 察

筆者は学習会を「共同体感覚を開発し、ヨコの関係を共に身に付けていくための研究と実験の場」と設定している。そのために、知的学習・体験学習・実践報告の3つの柱を持っている。参加者の感想文を見ると、彼らは今回の学習会の内容を非常に肯定的に受け取っていることが分かる。学習会が開催されてから1年半の間、ほとんど継続して参加している人々であるから、肯定的な受け取りは当然と言えば当然の結果である。

学習会の効果的な構成の仕方について以下に考察する。

先ず第1はエクササイズを組み合わせた。今回実行した椅子取りゲームは身体を動かし、笑い声を誘発し、心身とも一挙にリラックスすることができ、続くリスニングへの導入が大変スムーズになる。アドラー心理学はユーモアやジョークを使って、カウンセリングの場を明るく健全なものにするが、それは陽性の感情が人と人とを結びつけ、問題を深刻なものとはせず適切な心理的距離を持たせる働きがあると考えられるからである。実際にも、この導入によって参加者はリラックスし、リスニングやシェアリングに積極的に参加していたので、温かい雰囲気(心が豊に交流している証拠)が醸しだされていた。つまり、導入に際して、参加者がリラックスして心から交流できる適切なエクササイズを組み合わせることが重要であると言える。

第2はリスニングのテーマの取り扱い方である。今回のテーマは勇気づけられた体験の回想であった。感想文に見るように、勇気づけられた嬉しさ、喜び、自信、励まし、そして現在の自分があることを実感した参加者が多かった。また、体験を話し聴くことの楽しさや喜びを感じ、今後の勇気づけの実践をあらためて動機づけていた。勇気づけはアドラー心理学の最大の技法である。参加者は自身の体験を回想することによって、プラスの感情を確認でき、勇気づけの重要性を実感できた。では、マイナスの感情体験の場合はどうするか。マイナスの感情体験であっても、リスニングによって共感的に理解されたり、

リフレミングされて新しい物の見方を提供されたり、そこから教訓を得ることができたりされれば、それはそれでより深い勇気づけに役立つものとなる。要は材料をどのように役立たせるかをいつも心得ておくことである。

第3は筆者が提供する題材とテキストの内容が旨く合致していることである。今回のカウンセリング事例の要点は、親の養育態度が子どもの成育に強い影響を与えるということであった。そしてテキストは「いい親」であろうとするばかりに、子どもを甘やかす親の姿を浮き彫りにしている。それらは、子どもの主体性を大切にし能力を信頼する姿勢とは真反対のものである。前の段階で参加者は勇気づけの重要性を体験で感じているだけに、この段階で過干渉や過保護の態度が一層際立つものになる。さらにその誤りがテキストできちんと整理されたので、参加者は知적および感情的でも「不当に子どもの課題に介入しないことの重要性」が一層理解されたのであろう。

第4は実践報告のリアリティである。仲間である保母の実践が生々しく報告された。しかも今回は障害児へのアプローチであった。感想文に見るように、保育の大変さがひしひしと伝わってきた。しかも小林保母だけではなく、園全体の取り組みの姿勢が伝わったようである。アドラー心理学は通常は障害児を対象とはしない。言語的交流による認識や行動の変容を企図しているからである。今回の事例はかろうじて言語が通じる子どもであったこと、いつも2対1で濃密な保育が実施できたこと、保母が熱心であったこと、園全体の支えがあったことなどが成功要因であっただろう。さらに言えば、障害児だったからこそ、この世にかけがえのない存在であることがはっきりとして、障害を持っているにしても能力は引き出すことができることが示され、相互尊敬と相互信頼のヨコの人間関係の重要性がより深く認識されたとも言えよう。

第5は自己変革の意識である。これら保母は、子どもに自由画を描かせ、どろんこ遊びさせる「創造美育による自由保育」に取り組んでいた人々である。子どもの主体性や能力への尊敬の念は元々強いし、自身の行動傾向への気づきは敏感で的確である。それでも、「いい親と責任のある親の対比」には強いインパクトを受けている。特に子どもの課題に手を出し口を出し、場合によっては感情的になっていることに気づいていた。そして保育や生活の場で変革していきたいと感じている。従って、①ヨコの人間

関係の意識づけ、②子どもと大人の課題を分離し、不当に介入しないで見守る姿勢、③マイナスの感情を使用することの害を認識し、それらをコントロールする主張的行動（相手も自分も傷つけないで主張する仕方）を身につける事が必要であると思われる。また、本人たちも少しずつ変化しているのであるが、人前で意見を発表する恥ずかしさを感じる人がいるが、これは学習会についての安心感がまだまだ弱いからであろう。つまり、④全体グループで気楽に発言できる雰囲気づくりが必要である。これらの点は、今後学習会で取り組む課題としたい。

アドラー心理学の目標の「共同体感覚の開発」は、心理臨床の実際においては、①自己受容感、②他者信頼感、③貢献感を高めることである。上記の考察からは、①は十分であるが、②や③はまだ高める必要があると言えよう。従って、今後学習会を充実発展させるには、他者との触れ合いを多くする。そして、実践すべき事例を各自が特定し、皆で一緒に方策を考えて実践を試みて、その効果を確認することが考えられる。つまり、アドラー自身が行っていた顧問会議（教師が子どもの問題を説明し、心理学者と共に皆で討議する。次いで母親それから子ども本人とカウンセリングを行う形式。「問題児の診断と治療」1930には顧問会議による事例の解説と取り扱いが掲載されている。現在のオープン・カウンセリングの原型である）を開催できることが望まれる。そのためには、リーダーもメンバーもさらに学習を深める必要がある。

アドラーは、教育の力を高く評価して、次のように記している。「われわれは、すべての教師とは連絡できるし、彼らを通してすべての子供に接しようという希望はある。そのようにして、われわれは、すでになされてしまった過ちを是正し、子供たちを、自立的で勇気に満ちた、そして協同的な生活に向けて訓練することができるのである。こういう仕事にこそ、人類の未来の福利のための最大の希望が宿っているのだと、私には思える。……子供が、家庭生活において犯した過ちが、そのまま継続されるか、あるいは是正されるかは、教師次第なのである。教師というものは、母親と同様、人類の将来を護る者なのであり、教師が果たす役割の大きさは計り知れないものである」（アドラー1932、P204-207）。アドラーの残したメッセージをより豊かに保育や教育の場で実現できるように、アドラー心理学の理論と方法で貢献したい。

謝 辞

筆者の実践研究に対して貴重な機会と温かい支持をいただいている、熊本県天草郡大矢野町みつる保育園の吉田豊園長、あゆみ保育園の千原嘉介園長、慈愛保育園の塩田活也園長、ならびにアドラーガルドン大矢野の会員の皆様に深く感謝いたします。

注

- 1) 各学派には他にも実践的研究をやっている人もいるが、ここでは代表的な研究者を例に挙げた。
- 2) 野島の引用文内の（ ）は、文意が通じるように、引用文の前の言葉を筆者が書き入れたものである。
- 3) 磯野（1989）の言葉である。

文 献

- アドラー、A., 高橋堆治訳（1973）：問題児の診断と治療。川島書店。（Adler, A. 1930, The Pattern of Life. Cosmopolitan Book Cop., New York）
- アドラー、A., 高尾利数訳（1984）：人生の意味の心理学。春秋社。（Adler, A. 1932, What Life Should Mean to You. 1927, Menschenkenntnis.）
- 学校不適応対策調査研究協力者会議（1992年）：文部省
- 島瀬 稔（1981）：エンカウンター・グループ経験による教師の対人能力の促進に関する研究。日本心理学会第45回大会発表論文集、657。
- 平井信義（1986）：乳幼児の健康と心理。日本放送出版協会。
- 磯野淑紀（1991）：研究報告—斉授業における個にせまる学習指導。横須賀市立池上中学校研究推進委員会。
- 伊東 博（1983）：ニュー・カウンセリング。誠信書房。
- 河津雄介（1988）：教師性の創造。学事出版。
- 厚生省児童家庭局（1990）：保育所保育指針。日本保育協会。
- 國分康孝（1981）：エンカウンター。誠信書房。
- 野田俊作（1989）：アドラー心理学トーキングセミナー。アニメ2001。
- 野田俊作（1990）：アドラー心理学が身体化したカウンセラーを。アドレリアン、4(1), 1。
- 野田俊作（1991）：続アドラー心理学トーキングセミナー。アニメ2001。
- 野田俊作監修（1986）：実践カウンセリング。ヒューマン・ギルド出版部。
- 野田俊作・萩昌子（1989）：クラスはよみがえる。創元社。
- 野島一彦（1989）：わが国の教師教育とグループ体験学習。福岡大学総合研究所報、118, 19-64。
- 柴山謙二（1991）：アドラーメイトってなあに？ アドレリアン、5(1), 67-72。
- 児童・思春期精神障害研究班（1992年）：厚生省